



「Refugees」誌 通巻128号より

二つに分かれた バンツー系難民の 運命

1990年代前半、多くのソマリア難民がケニアに逃れるなか、バンツー系難民、数千人は先祖が奴隸としてたどった道のりを引き返していた。彼らは小型船を連ねてソマリアでの内戦を逃れ、タンザニア北東部にあるタンガ港付近に辿り着いた。ここは祖先が18~19世紀に奴隸としてアフリカ各地に送り出された場所であった。同じバンツー系難民でも、タンザニアにいる人々と、ケニアにいる人々の将来は大きく分けられる。ケニアの難民キャンプで10年間暮らしてきた約1万2000人は、アメリカへの第三国定住が決まり新天地での生活を待ちにしている。一方、タンザニアにいる3300人は、数百年前とほとんど変わらぬ暮らしを続けている。

彼らの将来を分けたのは、激しいソマリア内戦から逃れた時の行き先だった。ケニアに逃れた人々は、広大だが孤立した難民キャンプで10年間を過ごした。国際社会の援助で作られたキャンプだったが、具体的な将来の見通しはなく、タンザニアとモザンビークに受け入れを拒否された後、劇的にアメリカへの第三国定住が決まった。タンザニアに逃れた「もう一方の」難民は、同国政府によって、ムクユ地区の旧公務員の居住地を提供された。彼らの多くは現在もこの地に暮らしているジグア人の末裔まごいだが、なかにはタンザニアとは歴史的なつながりのない、非バンツー系のソマリア系ワマハイ人もいた。彼らはタンザニアの現地定住が許され、雨期の訪れやメイズとキャッサバの栽培、調理用の薪拾い、そしてヤギの飼育を中心とする昔ながらの生活サイクルに容易に溶け込んでいった。

ソマリアに生れ育ったとはいえ、彼らは、タンザニア人と同じジグア語のほか、スワヒリ語方言も話す。全員がイスラム教徒で、女性性器切除(FGM)や妻を4人までてる習慣など、文化的にも地元のタンザニア人と似通っているところが多い。

タンザニアにいるバンツー系難民はアメリカに移住するというケニアに逃れた同民族の者の運命を知らない。しかし、彼らも彼らなりの未来に期待をかけている。というのは、タンザニア政府が現在の居留地から80キロほど離れたチョゴ地

方に、バンツー系難民向けの土地を用意したのだ。その20平方キロほどの土地には、森林や川があり耕作もできる。しかもそこは、彼らの先祖が奴隸として捕らえられた時に暮らしていた場所だった。

地元当局とUNHCRは、この2年間に200万ドル(約2億4千万円)を投じて、難民と地元住民の双方が利用できる保健センターや警察署、学校、公園、店舗、市場、給水地の建設など、用地の開発を進めてきた。秋に向けて一部の農民は耕作を開始し、年内には多くのバンツー系難民がチョゴ地方に移動する予定だ。同じ頃、ケニアに逃れた人々はアメリカへの長い旅に出発する。

異なる二つの地に逃れたバンツーは、一方が数世紀をかけて強制移住の出発点であった所に戻ることになり、もう一方は米国での新生活が始まるとしている。

注：バンツー(Bantu)とは、もともと言語グループの名称だが、アフリカのカメリーンからケニアを結ぶ線の南の全域で話されている。このグループに属する諸言語を話す人々もバンツーと呼んでおり、総人口は約2億数千万人。ソマリアの人口750万人のうち推計約60万人がバンツー系とされる。ソマリアの氏族社会では、公的サービスへのアクセスや、他民族との結婚や就学、就業などで差別の対象になっている。

参考資料 The Cultural Orientation Project、世界民族事典(弘文堂刊、2000年)

